

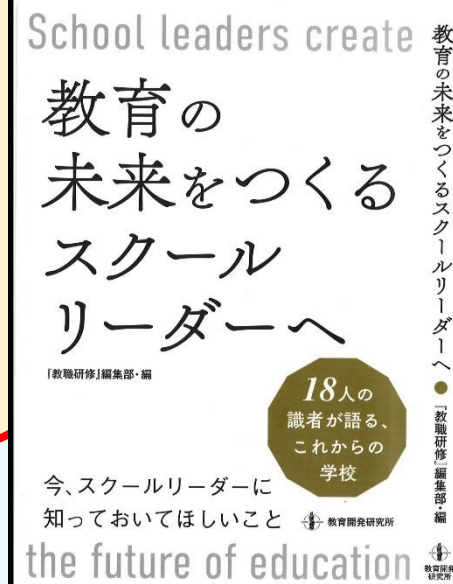
学校経営のビジョンと戦略を支援する参考図書の紹介 (その6)

18人の識者が語る、これからの学校!

# 「教育の未来をつくる スクールリーダーへ」

今、スクールリーダーに知っておいてほしいこと

教育開発研究所「教職研修」編集部著



「本書は、月間『教職研修』の2017年～2019年の間の巻頭インタビューを抜粋して収録されたものです。いずれも「これからの学校はこうあらねばならない」という方針や手段を明示するものではありません。

これからは、誰しもが認めるとおり、何が起こるか分からない時代が始まります。誰も確定的なことは言えませんから、学校が主体的に自校にとって必要なことに重点的に取り組んでいくことが求められてきます。

本書を読まれた後に、「では、自校ではどうするか?」「自分はこれから何をするか?」と考え、取り組んでいかれるきっかけになることを願っています。

(本書「まえがき」より)



《18人の識者》 出口治明、ロバート・キャンベル、ブレイディみかこ、青野慶久、榎本博明、神山潤、田中俊之、森達也、福岡伸一、宇野重規、橋本典久、鈴木瑞穂、向谷地宣明、為末大、井庭崇、岸田一隆、隅田英一郎、今井むつみ

# 主な内容（目次より）

## 1 教育の未来、キーワードは「多様性」

- ・自分の頭で考える子どもを育てよう
- ・「多様性」の問題を“自分事”として受け止めるために
- ・多様性は大変だし、めんどくさいけど、いいこと。

## 3 変化する社会と、教育

- ・「ポスト真実」時代の教育
- ・「動的平衡」から考える、教育という営み
- ・岐路に立つ民主主義と、教育

## 5 未来をつくる子どもたちの力と学び

- ・「個人の時代」を生き抜くための「主体的な学び」
- ・改めて「対話」とは何か
- ・「科学リテラシー」に人類の未来がかかっている
- ・AI翻訳で、英語学習は必要なくなるのか？
- ・「認知科学」から考える、AI時代の「学び」

### 改めて「対話」とは何か

「主体的・対話的で深い学び」、APの「知」に関する項目で、子どもたちの話し合いの充実を図ろうとされているものも多くあります。「対話的な学び」とはどのような学びであり、なぜ必要なのかを校内でも確認されていると思います。その前に、そもそも「対話」とは何でしょうか。『対話のことば』を刊行されている慶應義塾大学教授の井庭崇氏にインタビューしたものです。

## 2 学校の「働き方改革」実現に向けて

- ・これからの「働き方」を考えよう
- ・なぜ、日本人は定時に帰りづらいのか？
- ・先生、お願いですから寝てください。
- ・「男とはかくあるべし」から解放されなければ、働き方は変わらない

## 4 これからの学校・教師

- ・学校がうるさい！「苦情」増加時代の学校の在り方
- ・学校の「ハラスメント」問題
- ・安心して絶望できる学校ですか？

例えば、このタイトルはなかなかインパクトのあるものですが、内容を少し紹介します。

様々な調査結果から、日本の子どもたちの自己肯定感が諸外国に比べて低いことが明らかになっています。その処方箋の一つとして、悩みや苦しみを分かち合える文化＝安心して絶望できる学校をつくることが考えられます。その文化を大切にする「べてる」の「当事者研究」について、コミュニティホーム「べてぶくろ」主宰で、NPO法人BASE代表理事の向谷地宜明氏にインタビューしたものです。

APの「徳」に関する項目で、自己肯定感や自己有用感をあげられている学校が非常に多い中、参考にさせていただけるかもしれません。

※「べてる」とは、北海道にある精神障害等をかかえた当事者の活動拠点。